

戦後80年を迎えて③ 沖縄へ、そして沖縄から

■戦火に巻き込まれた沖縄

20世紀は戦争の世紀であったと言われるが、現在を生きる私たちは、今をどう生き、未来へどのような方向づけをしていくべきであろうか。

戦争を知らない世代が社会の中心的存在となつて久しいが、戦争の記憶が、世代交代という大きな流れの中で風化していくことが危惧されている。

私も戦争を知らない戦後生まれの世代である。ただ、東本願寺の職員(宗務役員)として、組織部時代に「東本願寺沖縄別院」の設立に携わることができた。そのことから、沖縄の視点で戦後80年の節目を考えてみたい。

1945(昭和20)年3月26日、米軍による慶良間諸島上陸に始まった80日あまり、約3か月にも及んだ沖縄戦は、太平洋戦争最後の決戦であり、国内唯一の住民をも巻き込んだ地上戦であった。

日本は、沖縄戦を長引かせようと考えていた。それは、沖縄戦で時間を稼ぐことで本土決戦の準備を整え、米国を迎え撃つという流れであった。この結果、長期間の戦いとなり、沖縄の被害は拡大したと言われている。また沖縄でできる限り戦い抜くということから、軍人以外の人(ひめゆり学徒隊・少年兵などの民間人)も最終的に戦線の部隊に配属され、多くが戦死した。

この沖縄戦において、亡くなられた方は20万人余。そのうち沖縄県民は12万人余の方が犠牲となり、かけがえのない命が失われた。多くの方は戦闘中の砲弾で亡くなられたが、また中には、自国の軍隊によって強要された集団自決や、スパイ容疑をかけられ虐殺されるということもあった。こうした戦争の悲惨な実態と、軍隊の恐ろしさが露わになったのが沖縄戦であった。

にもかかわらず、その後、これらの事実の思いを致すことなく、ひたすらに世の繁栄を欲求していく中で、沖縄戦は忘れ去られていくことになったのである。そして戦後、現在に至るまでも、沖縄の方々に戦争の暗い影と負担が重くのしかかっていくことになる。

2004年の沖縄国際大学での米軍ヘリ墜落事故は

言うまでもなく、2016年には名護市の住宅地間近の沿岸にオスプレイが墜落。また、ヘリコプターが宜野湾市の保育園や小学校に立て続けに物を落下させたことなど、米軍基地が存在することに起因する、沖縄の人たちに危害を加える事故や事件が繰り返されている。

一方で世界に目を向けるならば、ロシアによるウクライナ侵攻が勃発し3年が経過した。またイスラエルによる武力侵攻が今もなお続いており、世界中で戦争、紛争が後を絶たない。このように、未来に戦争を維持していくような仕組みに不安を覚えずにはおれない。

■『大無量寿経』の願い「国豊民安 兵戈無用」

立ち戻って、我々宗門も、過去に繰り返してきた戦争を聖戦と呼び、国の繁栄と発展のための正義の戦争であるとして、それに加担してきた。そのことを思うとき、「兵戈無用」と説かれた釋尊、「世の中安穏なれ仏法ひろまれ」との悲願に立たれた親鸞聖人のお心に背き続けている私の姿があぶり出されてくる。

ここに改めて、2015年に宗会で採決された「非戦決議2015」での沖縄に関する文章を記したい。

決議より20年、戦争の悲惨さと愚かさに対する人々の感覚は風化してきています。その風化は、現在も、基地問題で苦しむ沖縄の人たちの心に向き合おうとせず、戦争に向かう状況を生み出そうとしています。私たち人間の生きざまを憐れんで『国に地獄・餓鬼・畜生あらば、正覚を取らじ』と誓い、法蔵菩薩は、浄土を建立されました。

永い人類の歴史は、人が人を殺し、傷つけ合う悲しみの連続でありました。如来の願心は、自我愛を正当化し『賜ったいのち』を奪い合うことを悲しみ、私たちに『共に生きよ』と呼びかけておられます。

この呼びかけに応じ、『殺してはならぬ、殺さしてはならぬ』という仏陀の言葉を如来の悲願と受け取り、あらためてここに『非戦の誓い』を表明いたします。

そして、世界の人々と積極的な対話を通じて『真の平和』を希求してまいります。

※ なお、戦後80年を迎えるにあたり、本年の宗会において「非核非戦決議2025」が採択されたので、ご一読いただきたく記しておく。

■「東本願寺沖縄別院」―非戦平和の礎を―

思えば、宗派が1993年に沖縄開教本部を設置して以来、その17年間の活動は、「沖縄のこころ」から学ぶ歩みであった。その「こころ」とは、固有の文化の伝承であり、自然を尊ぶ謙虚な姿勢であり、先の大戦の惨禍から人間の尊厳を何よりも大切にする恒久的な平和への願いであった。

そして、2010年に設置された「東本願寺沖縄別院」は、沖縄出身である玉代勢法雲氏によって建立されたハワイ開教区「マカレー東本願寺」で崇敬されていた御本尊や仏具が移設され礎となっている。



東本願寺沖縄別院御本尊

氏は39歳の時、開教使としてハワイへ渡ることになる。1936年、スミス布教所を移設して新たに布教拠点となるべくマカレー東本願寺を建立する。その後も75歳で亡くなるまで、ハワイ各地において精力的に布教活動に従事している。その後、マカレー東本願寺は止む無く解散を余儀なくされるが、沖縄別院設立と軌を一にするかのごとく、氏の故郷である沖縄でご崇敬されることとなる。

この御本尊を依り処として、玉代勢氏をはじめ親鸞聖人の教えを聞き続けられた方々の篤い思いを、この沖縄の地で大切に受け継いでいかなければならない。

「沖縄へ、そして沖縄から」先の沖縄戦に思いを馳せ、平和で豊かな、人々が安心して暮らせる社会を実現していかなければならない。

岐阜高山教務所長

海老原 章



非核非戦決議 2025

戦後 50 年を経た 1995 年 6 月、真宗大谷派は、自らの罪責を懺悔し人類の願いを「不戦の誓い」として表明しました。

「不戦決議」

私たちは過去において、大日本帝国の名の下に、世界の人々、とりわけアジア諸国の人たちに、言語に絶する惨禍をもたらし、佛法の名を借りて、将来ある青年たちを死地に赴かしめ、言いしれぬ苦難を強いたことを、深く懺悔するものであります。

この懺悔の思念を旨として、私たちは、人間のいのちを軽んじ、他を抹殺して愧じることのない、すべての戦闘行為を否定し、さらに賜った信心の智慧をもって、宗門が犯した罪責を検証し、これらの惨事を未然に防止する努力を惜しまないことを決意して、ここに「不戦の誓い」を表明するものであります。

さらに私たちは、かつて安穏なる世を願い、四海同朋への慈しみを説いたために、非国民とされ、宗門からさえ見捨てられた人々に対し、心からなる許しを乞うとともに、今日世界各地において不戦平和への願いに促されて、その実現に身を捧げておられるあらゆる心ある人々に、深甚の敬意を表するものであります。

私たちは、民族・言語・文化・宗教の相違を越えて、戦争を許さない、豊かで平和な国際社会の建設にむけて、すべての人々と歩みをとることを誓うものであります。

右、決議いたします。

(戦後 50 年) 1995 年 6 月 13 日 真宗大谷派 宗議会議員一同
1995 年 6 月 15 日 真宗大谷派 参議会議員一同

私たちは、この決議の重みを再確認し、平和の意味、そして自らの姿を問いたいと思います。

決議より30年、基地問題で苦しみ翻弄される沖縄に何度も訪問視察してきましたが、寄り添うことの難しさを痛感しました。

戦争の悲惨さと愚かさに対する感覚は時の経過と共に風化しつつあり、加えて、現在も続いているロシア連邦によるウクライナへの侵攻は、未だ終息の兆しは見え、核兵器の使用をも示唆し威嚇しています。パレスチナ・イスラエル紛争も、激化の一端をたどっています。

戦後80年を迎える今、身近なところではもとより、多くの犠牲を出した、激戦地沖縄や被爆した広島・長崎での体験を語ってくださる方も少なくなっています。

「怨みに報いるに怨みを以てしたならば、ついに怨みの息むことがない」

(『法句経』)

永い人類の歴史は、人が人を殺し、傷つけ合う悲しみの連続でした。如来の願心は、自我愛を正当化して「賜ったいのち」を奪い合うことを悲しみ、私たちに「共に生きよ」と教えられています。

私たちは、この教えを聞きひらき、自らの姿を問い学び、戦争の悲惨さと愚かさを次世代へ伝承するために、あらためてここに「非核非戦の誓い」を表明します。

(戦後 80 年) 2025 年 6 月 7 日 真宗大谷派 宗議会議員一同
2025 年 6 月 9 日 真宗大谷派 参議会議員一同

